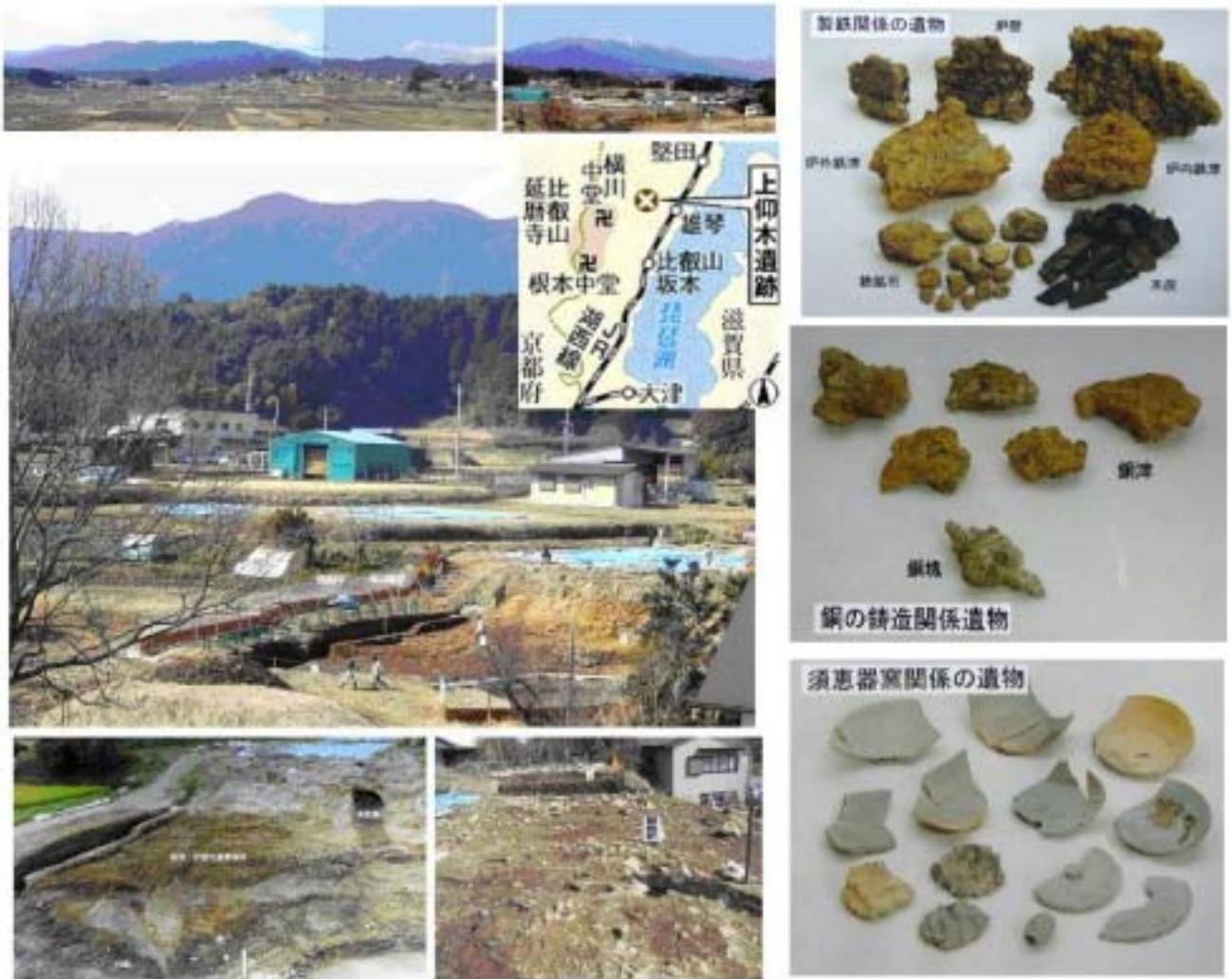


4.

比叡山延暦寺造営を支えた生産工房 上仰木製鐵遺跡

滋賀県大津市上仰木

2006.2.25.



比叡連峰を見上げる山麓の丘陵地大津市仰木「上仰木遺跡」で、平安時代前期（9世紀後半）の製鉄炉跡と木炭窯跡各1基、そして製鉄に伴う大量の鉄滓（てっさい）などが出土した。

「2月25日日曜日に現地説明会がある。」と聞いて、「古代鉄の先進地 近江の古代製鉄炉が見られる」と飛んで行ってきました。

古代近江国は大陸・朝鮮半島からの文化・技術の流入口。数多くの渡来人がやってきて 数々の新しい文化・技術を伝え大和王権・日本誕生を支えた。それらの中で最も重要な技術の一つが鉄の技術である。

琵琶湖を取り巻く山々には鉄鉱石があり、山麓には数多くの渡来人が住みつき、大陸・朝鮮半島に依存していた鉄の自給を試みる。琵琶湖を取り囲むように比良山系・三国・赤坂山系・伊吹山系そして鈴鹿から瀬田丘陵へと古代の製鐵地帯が広がる「古代 鉄の国」で、北近江の古橋製鉄遺跡は日本でも最も古い6世紀後半の製鉄遺跡の一つであり、南の瀬田丘陵には鉄の自給を成



し遂げ、7世紀後半から8世紀にかけて 律令国家の体制を確立してゆく大和王権を支えた木瓜原・野路小野山製鐵遺跡など大規模な製鐵遺跡がある。

そんな鉄の国の中で 和邇氏や鴨氏の本拠地 比良山麓と瀬田丘陵に挟まれ、近江国の中心地に一番近いのに比叡山麓だけが、鉄の空白地になっていて不思議に思っていました。

そんな古代製鐵の空白地 比叡山の麓 大津市上仰木で「製鐵炉を含む古代の製鐵遺跡が出土し、2月25日日曜日に現地説明会がある。」と聞いて、「古代 鉄の先進地 近江の古代製鐵炉が見られる」と飛んで行ってきました。

また、発掘調査が進んでいる途中で 発掘現場をそのままみることができ、上仰木遺跡の現地説明と共に出土した赤茶色に土が焼けた製鐵炉跡をしっかりと見ることが出来ました。

また、 帰りには この上仰木から 比叡山を越えて京都への古道を歩きたくなくて、坂本に出て 比叡山 延暦寺から比叡山の最高峰四明ヶ岳を経て きらら坂を下りて修学院に出てきました。



滋賀県 近江国の製鐵関連遺跡分布

1. 仰木の里と上仰木製鐵遺跡概要



滋賀県大津市仰木 京都 山科から東海道線と分岐して湖西線 逢坂山の長いトンネルを抜けると大津市西部 近江国の国衙があった地域である。

琵琶湖と比叡・比良の山々に挟まれた山裾を琵琶湖に沿って 北へ三井寺や皇子山・比叡山の門前町「坂本」など歴史の街を過ぎると約15分で雄琴。

琵琶湖西岸では一番平野部が山裾億へ入りこむ地域で湖岸から ならかな丘陵地が比叡の山裾にまで広がる。そんな比叡の山麓が幾重にも裾をひいて平野部に出てくる海拔150mから200mの丘陵地に「仰木の里」があり、 眼下に見る琵琶湖岸までならかな丘陵地が何本も平行して延び、それらの谷や斜面を利用した段々畑が広がる素晴らしいのどかな田園風景を作っている。

最近では 湖西線の開通で新しい住宅地が この丘陵地にも次々と開かれているが、丘陵地の一番奥 仰木の

里にはまだまだ 琵琶湖を眼下に眺めながらの日本の原風景が広がっている。

この仰木の地は比叡連峰横川にある延暦寺吉川中堂を通過して 比叡山延暦寺根本中堂にいたる「仰木道」の起点に当たる山麓で、比叡山延暦寺が開かれて以来 南の坂本集落と共に 比叡山と麓をつなぐ麓の中心集落となった。 今もここから 横川を経て 比叡山上の延暦寺を結ぶ奥比叡ドライブウェイが通じている。

眼下に琵琶湖を見下ろし、振り向くと直ぐ後ろには比叡の峰々。 そして北には雪をかぶった蓬萊・打見山がどっしりとすわり、ゆるい傾斜地一面に田園風景がひろがっている。



上仰木製鉄遺跡の位置



比叡山 延暦寺が開かれるまでは深い緑の森で、この仰木の里の北側を流れる天神川沿いわずかに須恵器を焼く集落があった程度で、近江国の木地師たちがこの森に入っただけで古代には定住集落はほとんど

なかったという。

そんな丘陵地の丘の斜面上に古代といっても 鉄の自給が始まる 6 世紀後半からはずっと後の 9 世紀 平安時代初期の製鉄炉跡が大量の鉄滓と共に出土した。

ちょうどこの時期は 8 世紀末 788 年に最澄によって開かれた比叡山延暦寺が大造営される時期にあたり、この時期以降 今回出土した製鉄遺跡ばかりでなく、次々と集落や寺院遺構が見つかるなどこの地は比叡山と共に発展してきた地であった。

遺跡はそんな上仰木の集落の外れ、比叡山麓から琵琶湖に注ぐ天神川近く 谷に沿った丘にあり、当時 この丘の下の谷を天神川の支流が流れていたという。

製鉄炉は谷に沿った丘の縁にあり、長さ 1.2メートル 幅 0.5 メートルの箱型炉が築かれ、すぐ傍 崖の縁を利用して木炭窯が築かれている。これらと共に鉄鉱石・木炭も見つかっている。また この炉に隣接する丘の縁から谷の川岸への斜面にかけて 20 メートル四方厚さ 2.2メートルにわたって 約 120 トンを越える大量の鉄滓や炉壁片が堆積していた。



今回発掘された上仰木製鉄遺跡 2006.2.25.

また、発掘が一部始まったばかりで 製鉄に関する主要設備遺構としては製鉄炉跡 1 基とそれに隣接した木炭窯が出土しただけで、ほかの製鉄炉や鍛冶炉など生産工房としての諸施設はまだ見つからない。大量の鉄滓などから推定して、製鉄炉も 1 基だけでなく複数存在し、鍛冶炉もこの周辺に存在すると見られ、まわりからは製作に失敗した須恵器の破片多数や銅滓と小さな銅塊も見つかっている。

これらのことから、製鉄と共に銅の鑄造や須恵器なども作ったと見られて、比叡山延暦寺に資材を供給した大規模な総合生産工房だったと考えられている。

比叡山の山裾 森林で覆われた木地師の里がひっそりあったところが、比叡山の造営と共に建築資材、くぎなどの鉄や銅など寺院造営の資材の生産・調達の基地として開かれていった。

また、比叡山延暦寺初期の資料はほとんど残っておらず、この生産工房の実像が今後の発掘調査で明らかになっていけば、比叡山造営の様子など初期比叡山の実像が見えてくると期待されている。



120 トンを越える鉄滓が堆積した川岸の崖



木炭と鉄鉱石 炉壁 炉外排出滓 炉内鉄滓 銅塊と銅滓 須恵器破片

延暦寺造営の総合生産工房であることを示す上仰木製鉄遺跡出土品 2006.2.25. 上仰木遺跡現地展示より

2. 比叡山麓 古代の製鉄遺跡「上仰木製鉄遺跡」を訪ねて 2006.2.25.

琵琶湖岸 古代の里 仰木から比叡山を越えて きらら坂を京都へハイク



比叡の山並みを背景に棚田が美しい仰木の里 2006.2.25.

2.1. 棚田の美しい田園が広がる仰木の里へ 田園ハイク

- 比叡山延暦寺造営を支えた生産工房 上仰木製鉄遺跡をたずねて -

2月25日 快晴 早朝 「古代の製鉄炉が出土したままで見られる。それも眼下に琵琶湖を見下ろす比叡の山裾で」と期待一杯で近江今津行の新快速に乗る。

地図では大津の市街地の西側 比叡山の山裾 延暦寺の里房が立ち並ぶ門前町 坂本からさらに山裾を北に3kmほどいったところ。湖西線 雄琴駅と北の堅田駅の間湖岸から比叡山の山並みへ幅約2~3kmの緩やかな丘陵地が続く。

北には比叡山系と比良山系との間を京都へ抜ける途中越の道があり、また 仰木から横川を通過して比叡山に登る奥比叡のドライブウェイが通じている。

上仰木遺跡はこのドライブウェイの直ぐ横 湖岸から比叡の山に続く丘陵地の市街地の外れ 仰木集落の直ぐ上にある。また、この仰木の里は丘陵地の上 湖岸を見下ろす素晴らしい棚田の里と紹介されている。

前週 上仰木遺跡の発掘調査をした滋賀県文化財保護協会に電話で位置を確かめたが、「比叡山山裾の丘陵地で仰木の小学校の所から山の方へ少し入った所 足元をしっかりと」と聞く。

鉄遺跡だけは行って見ないとどんなところなのか 解らない。

期待いっぱい堅田駅に降り立つ。

期待いっぱい堅田駅に降り立つ。



堅田駅西側から見る比良山系蓬莱・打見山 2006.2.25.

「上仰木製鉄遺跡は比叡山造営を支えた生産工房。久しぶりに比叡山に登って、延暦寺から四明嶽から京都側の蛇が池から きらら坂を修学院へ 久しぶりに比叡山を越えて帰ろう。」

堅田は平成の大合併で大津市堅田。湖岸側に近江八景「堅田の浮御堂」などが広がる歴史の街。また、西の山側の丘陵地には幾つもの新興住宅地が広がる。

駅前で街の案内地図をもらって、比叡の山並みが並ぶ駅の西側に出るといきなり北側 田園の向こうに雪をかぶった比良山系蓬莱・打見山がどっしりと座っている。

比叡山そっちのけで見入る。何度も学生時代に登った山で、こんな堂々とした姿で見たのは久しぶり。うれしくなってしまう。その山裾には古代渡来の和邇氏の本拠地滋賀の里が広がり、製鉄遺跡が点々と続く。

堅田駅から南へ雄琴駅の方へ戻りながら 西へ比叡山の山裾を仰木の集落へ丘陵地をあがってゆく約4kmほどの里歩きハイク。目印は奥比叡のドライブウェイ。

駅前でもらった地図を眺めながら、比叡の山並みに沿って田園の中を南へ15分ほどで、歩くと前方にひっきりなしに車が通る道路に出る比叡の山並みから流れ出る小さな川に沿って湖岸から丘陵地へ上がってゆく大きな道路に出る。川の反対側には川に沿って遊歩道があり、ジョギング人たちがいる。この川が比叡の山並みから流れ出し、東にカーブしながら 仰木の集落の縁を通過して、北側を流れ下る天神川。

広い道路が湖岸道路をくぐったところで道はまだ真っ直ぐ東へ丘陵地を登って行くが、住宅地「仰木の里」と書かれた大きな標識と丘陵地の中腹を南へトラバースして広い道路が見え そちらに曲がる。地図ではこの住宅地を抜けた端を90度折れ曲がって東に登ってゆけば「仰木」の集落である。



天神川



丘陵地の上を南にトラバース「仰木の里」 2006.2.25.

丘陵地の丘の上に広がる大きな団地「仰木の里」を横切ると丘陵地と丘陵地の間に広がる広い谷の縁に出る。湖岸に向かってゆるい傾斜の馬蹄形の広い谷で向こう側の谷の縁を雄琴から仰木への道が登って行く。そして、比叡の山並みを背景に谷の中全体が段々畑になっていて、素晴らしい景色である。ここが「仰木の棚田」らしい。まだ早春で赤茶けているがここに水が張られればもっと素晴らしい景色になるだろう。

目を湖岸のほうに転ずると琵琶湖の向こうに近江富士がかすんでいる。

また 右手のU字の底になる谷の一番高いところに仰木集落の家並みが連なっているのが見える。

日本の原風景といったのどかな景色を楽しみながら仰木の集落に登ってゆく。



右手仰木集落をU字の底に馬蹄形に琵琶湖へ向かって美しい棚田が広がる仰木の里の谷



U字谷の一番上からの景色

棚田がひろがる 仰木の里 2006.2.25.

この谷の上のところで 道の両側に古い家並みが続く仰木の集楽に入る。この街道は丘陵地の上を仰木の集落を抜けて比叡へと続いている。



比叡山麓の丘陵地の上 比叡への街道の両側に広がる大津市仰木の集落 2006.2.25.

雄琴から上ってくる道に出るすぐ手前で山側に折れ、目印の仰木小学校のところに出るとそこから比叡連山の山裾まで幾重にも続く丘陵地全体に段々畑が続いている。

この田園の中に比叡の山に向かって大きなキャンパスを広げて、この田園風景を描いている人がいて、反対側には雪を戴いた蓬莱・打見山がどっしりと座っている。この光景そのものが素晴らしい田園風景である。この丘陵地の一角に上仰木遺跡があるはずであるが、ぐるっと見回しても良くわからない。絵を描いている人も良く知らないがもっと上だろうという。



中央の竹藪が谷になっていて その奥が上仰木製鉄遺跡



丘陵地のくぼ地いっぱい田畑がひろがる上仰木 2006.2.25.

雄琴から登ってきた奥比叡ドライブウェイとぶつかった所に文化財保護協会の人立っていて、ドライブウェイに行かず 斜めに東への枝道を取るよう仰木遺跡への道を案内してくれる。「遺跡はどこですか」と聞くとグルツと弧の字に田園の中の道を北の方に戻っていったところ 先ほど通ってきた小学校裏手の丘陵地ともう一つ奥の小さな丘陵地の谷間だという。やれやれである。

細い道を車が次々とすり抜けてゆき、途切れ途切れであるが同じ方向に上仰木遺跡の現地説明会に参加する人の列が続いている。明日香や奈良の遺跡の現地説明会ほどではないが、同好の士が多い。

道と少し進んだところでクロスする丘陵地と丘陵地が重なる小さな谷で道路をつける工事をしていて、右手

北に伸びる道が途中で止まっている。
その先約 500m ほど先の丘に多くの人が見え 上仰木遺跡とわかる。

この道路工事が浜大津から途中越の伊香立へとつなぐバイパス工事でこの道路に引っかかる事前上仰木遺跡の発掘調査で平安時代初期の製鉄炉や木炭窯などの製鉄関連遺構が出土した。
直接この谷筋を歩いてゆけないので遺跡へは田園の中の道をぐるっと回りこんでゆく。



途中越の伊香立へとつなぐ工事中のバイパス道路と上仰木遺跡

堅田駅から 1 時間ちょっと 比叡と比良の山並みと琵琶湖との間に棚田が広がる丘陵地をきよろきよろ眺めながらの田園ハイクで上仰木遺跡に 11 時前に到着。

比叡と比良を背景に素晴らしい田園風景が展開するその中央に上仰木遺跡がありました。
湖岸は本当に何度も通りましたが、その上の丘陵地に素晴らしい田園風景が広がる古代の里があるなど思いもよらぬことでした。



丘陵の南東側から見る上仰木遺跡



南西奥に比叡山の主峰 四明ヶ嶽
上仰木製鉄遺跡 周辺

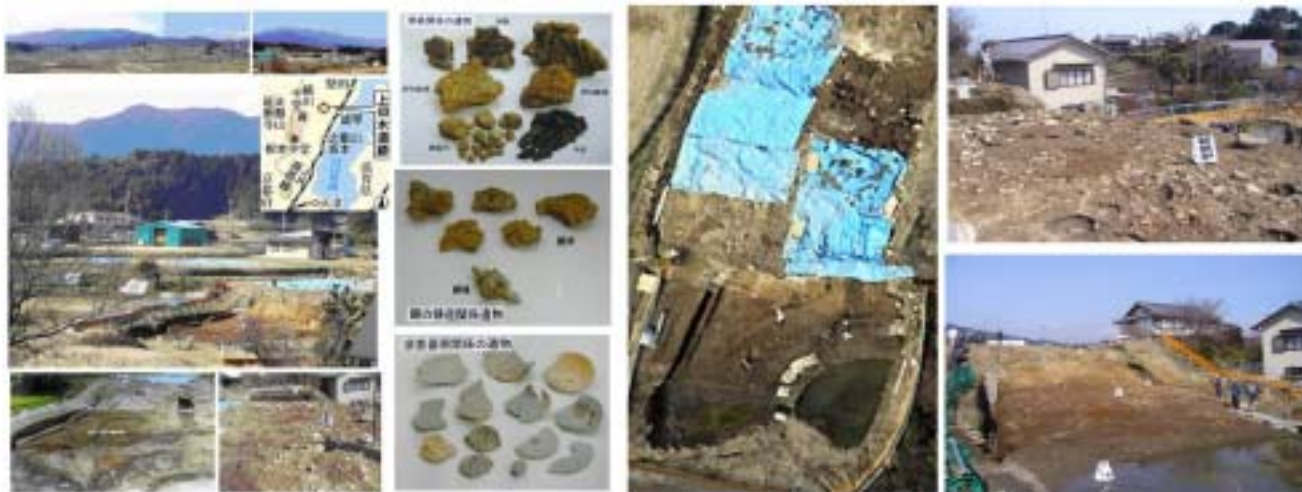


遺跡へのあぜ道にお地蔵さん

2006.2.25.

2.2. 比叡山延暦寺造営を支えた生産工房 上仰木製鉄遺跡 大津市仰木

- 比叡山延暦寺造営を支えた生産工房 上仰木製鉄遺跡をたずねて



丘の南東側から畑が広がる田園道を西北側にぐるっと丘をまわりこんで 西側から遺跡に入る。
午前 11 時から現地説明会があるので、多くの人々が詰め掛けている。遺跡に入ったところにプレハブの事務所

が建っていて、そこに今回の調査で出土した鉄滓・鉄鉱石と木炭、そして須恵器の破片・銅滓と銅小塊などが展示され、その前は人でごった返している。

そして、この奥と西側の田圃が今回の調査地点で、その一部に青いシートが一部かぶせられている。

遺跡に立つとグルツと360度のどかな田園地帯が見渡せる。北側から南西側に遠く比良蓬萊山そして比叡連山が並び、これらの山を背にして丘陵地の上に田畑が一面に広がり、その向こう遺跡の東から南東側には琵琶湖の湖岸から約200mほどの高さの位置にある仰木の集落が広がっている。そして遺跡の西側を南北に連なる連山の山中、南西約4kmのところには延暦寺横川中堂、約10kmほどのところが延暦寺根本中堂である。



上仰木遺跡の入り口



南から バックに雪の蓬萊山



南東から バックに比叡連山



北西から 天神皮越しに遺跡 バックに仰木集落

周辺の丘陵地から見た上仰木遺跡全景

2006.2.25.



上仰木製鉄遺跡の全景



上空からの写真



上仰木製鉄遺跡 発掘調査現場 2006.2.25.

今回の上仰木遺跡の調査地は東西に約東西約40m 南北約90mほどの田畑でそのうちの北側半分が田畑 南半分が崖の斜面を含む谷。そして今回主要な製鉄遺跡が出たのは東側半分の所で、この場所の北西端に事務所がたっていて、その奥に調査地点が広がっている。

また、南半分のところは青いグラウンドシートがかけられ、今回公開されなかった。

遺跡の南端が崖となって南西から北東へと小さな谷がのびていて、今は小さな崖と湿地になっているが 平安時代から江戸時代にかけて 小さな川が流れていたという。パイパス道路が工事されている谷で、向こう側丘陵の上に先ほど通ってきた仰木小学校や仰木の集落が続いている。

事務所の出土品を見ている人たちの横をすり抜け、奥の発掘現場にゆく。南の端が崖になっている手前半分に青いグラウンドシートがかけられ、その奥が製鉄炉が出土した所。製鉄炉の案内板が置かれた直

ぐ横の地面が四角く赤茶けていて、そこだけかが穴も石も平らである。これが 製鉄炉の底の部分で 炉の下部構造もないようなので やっぱり古いタイプの箱型炉か・・・

崖に並行する両側の穴ばこの部分にも赤茶けた部分が見え、炉から鉄滓を排除した部分で崖の前 前後方向に靴が据えられたのだろう。鍛冶炉がないかと周囲を見渡すが、ここにはなし。

後ろのグラウンドシートのかけられた場所も後の時代の住居跡と 教えてもらった。

そして 炉の奥 崖の北の端に木炭窯の案内板が置かれ、この崖を利用して作られた木炭窯があった。

崖の端から高さ約3メートルほどの下の谷に降りる通路がつけられていて、その通路に沿って崖いっぱい鉄滓が捨てられており、その奥に木炭窯が見える。かつて川であったという谷は湿地で遺跡の橋には水がたまっていた。

谷から遺跡の崖を見上げると崖にそって 比叡連山が頭をのぞかせていて、比叡の近さは実感されるが、新聞に書かれている比叡山延暦寺の生産工房の実感はなく、現地説明が楽しみ。



製鉄炉跡が出土した崖の上の部分 2006.2.25.



出土した製鉄炉跡とその奥木炭窯



崖の下の谷に広がる膨大な鉄滓の堆積と木炭窯



上仰木遺跡 調査区域の全景と出土品 製鉄・銅・須恵器関係出土品 現説資料より

【1】 木炭と鉄鉱石 「粉鉄七里（こがねしちり）に炭三里（すみさんり）」

この上仰木製鉄遺跡では 出土した製鉄炉周辺からは主原料の小さな鉄鉱塊がみつき、製鉄路の直ぐ隣には木炭窯がある。この製鉄遺跡が営まれた頃 この一帯は森になっていて、「炭三里 鉄七里」と言われるように製鉄に必要な木炭が周辺の森の木々をここで焼いたと考えられている。

また、大陸からいち早く製鉄技術がもたらされた近江では6世紀後半古代初期の製鉄 湖北の古橋製鉄遺跡や湖南の7世紀後半 源内峠・木瓜原製鉄遺跡 そして8世紀の野路小野山遺跡に至るまで 砂鉄ではなく鉄鉱石を原料とする箱型炉操業が行われていた。

近江には琵琶湖を北側から西側に取り囲む山中や湖南の山中の花崗岩地帯に鉄鉱石の鉱脈があり、比叡山の山中にも鉄鉱石の露頭がみられる。

特定はされていないが、製鉄原料としてこの近江国の鉄鉱石が使われたと考えられている。

この上仰木製鉄遺跡の原料鉄鉱石もこの比叡山周辺の山中のものが使われたのではないかと考えられている。

この上仰木遺跡の製鉄は 出土した製鉄炉跡の直ぐしたの谷から発見された須恵器破片などから9世紀後半と考えられており、各地で砂鉄による製鉄が盛んになってゆく中で鉄鉱石原料の製鉄が維持されていることがわかる。



崖を利用して作られた木炭窯

(近江の鉄鉱石産出の候補地としては 露頭が見られる 北近江 葛籠尾崎 湖南 石部山 湖西比叡山の山中などが考えられている。)

【2】 製鉄炉

丘の南端の崖に沿って 製鉄炉が一基出土。

まわりが穴ぼこだらけなのに長方形に平らで赤茶けたところが見られ、これが製鉄炉跡であった。

崖に沿う東西方向に長さ1・2メートル、そして幅0・5メートルの箱型の製鉄炉で、周辺から鉄鉱石の小塊が見つかることから、これを砕いて原料にしたと見られる。

構造は簡単な床構造の古代の製鉄炉で直ぐ下の谷から大量に見つかった須恵器破片の形式や何時書に見つかった少量の土器などから、9世紀後半平安時代初期の製鉄炉跡と見られている。

炉の両側に幾つも穴があり、排滓した鉄滓を入れる穴と見られて、この地面も赤茶けている。

また 直ぐ下の谷は小さな川の川岸で、炉を壊して取り出した鉄塊がここで冷やされたのだろう。また 崖から川岸にかけて大量の鉄滓や崩された炉壁片が堆積している。

製鉄炉は複数であったと考えられるが、まだ見つからない。また、製鉄の次のステップである鍛冶炉も見つからない。堆積した鉄滓の量から考えて それらがこの周辺地域に眠っていると見られている。



【3】 堆積した鉄滓

製鉄炉の直ぐ下の崖から谷にかけて約20メートル四方 厚さ2.2メートルに渡って大量の鉄滓が堆積しており、その量は約120トンに及び、崖全体が鉄で赤茶けている。そして、捨てられた鉄滓 炉内滓・炉外滓 炉壁の種類によって、ちょっとづつ 組成や質が違って、それらの違いによって崖の色がちょっとづつ違っている。

また、調査域の南西側に続く谷の崖のところからも試掘で鉄滓があり、調査域の南西側にも遺跡が続いているという。まだ鉄滓の細かい調査が進んでいないので、詳細はよくわかっていないが、炉壁片には平らで直線的な段差が見られ、当時の築炉法である粘土で作られたブロックを積んで作られたと考えられている。



炉内滓



炉外滓



炉壁片

【4】銅滓・銅小塊と須恵器破片



銅塊と銅滓



須恵器破片

製鉄炉跡から約150メートル西の丘陵地から10 - 11世紀の銅の小塊や遺跡周辺の谷などから大量の須恵器の破片や土器が見つかった。

特に須恵器破片は延暦寺大講堂で確認された須恵器と形状・土質の面で一致し、この遺跡が9世紀後半の延暦寺の大造営と強い結びつきを持っていたと考えられている。

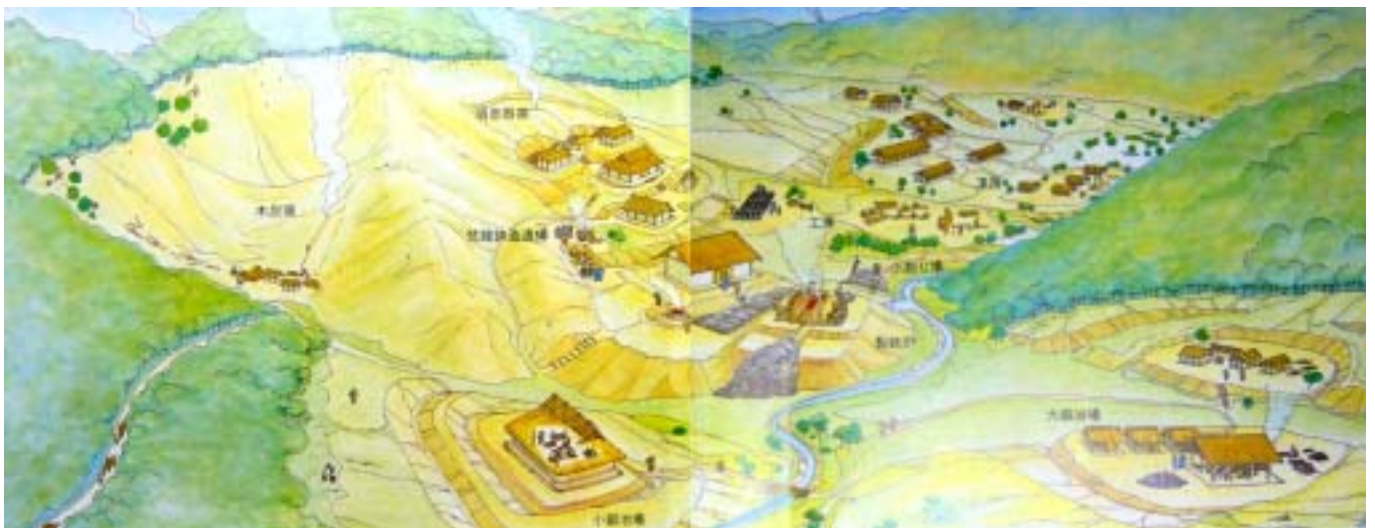
【5】延暦寺の大造営を支えた総合生産工房としての性格

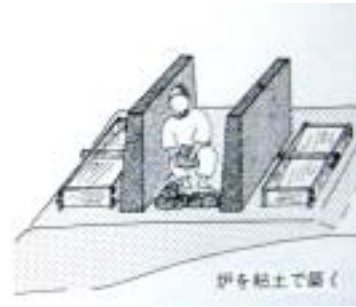
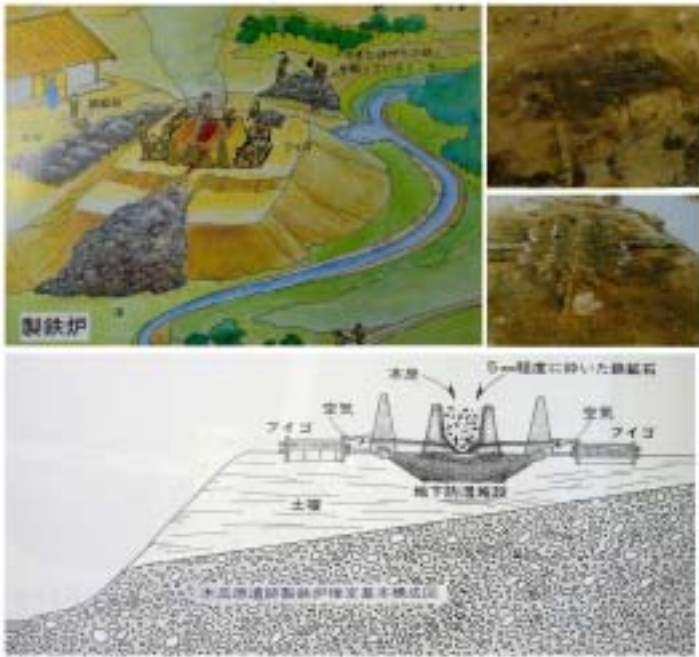
延暦寺は788年に最澄が開いたが、当初は堂舎がほとんどなく、9世紀半ば以降、円仁、円珍らが横川中堂ほか次第に大伽藍を整えていったとされ、今回発掘された上仰木遺跡の遺構と時期的に重なっている。延暦寺の須恵器の中にこの上仰木遺跡の須恵器が確認されていることそして、製鉄関連遺物ばかりでなく銅の鑄造や須恵器関連遺物が見つかり、また中心となる製鉄炉が一基そして鍛冶炉も発見されておらず、時期もわずかに出土した土器からの推定で不確かな面も多いが、位置的にも比叡山横川中堂が約3キロほどの距離であり、この遺跡が9世紀半ばから11世紀にかけての延暦寺の大造営を支えた総合的な生産工房遺跡の可能性が強く、今後この上仰木遺跡の周辺からさらにその遺構が見つかると考えられている。

このような製鉄を中心とした古代近江の生産工房遺跡としては7世紀末から8世紀初め大和政権が律令国家としての体制を確立してゆく時期の官営の近江の中心的製鉄コンビナート木瓜原遺跡がすぐ頭に浮かんだ。湖南瀬田丘陵の立命館大学瀬田キャンパスの地である。

もっとも、上仰木遺跡の方が150年以上後の遺跡であるが、生産工房の諸施設も製鉄炉の形式もイメージ的にはよく受け継いでいるようだ。

そんな「古代鉄のコンビナート木瓜原遺跡」のイメージ図が木瓜バラ遺跡の資料の中にありましたので下記に示します。





古代 近江の製鉄を中心とした総合生産工房イメージ図

古代の製鉄コンビナート 立命館大学びわこ・くさつキャンパス 木瓜原遺跡の発掘より

3. 比叡山からきらら坂を京都修学院へハイク (2006.2.25. 写真アルバム)



大津市仰木の郷からみる比叡の山並み

比叡山延暦寺と関係深い上仰木製鉄遺跡。直ぐ横には比叡連山が横たわっている。そして 南西一番奥に比叡山の最高峰四明が嶽が山の重なりの中から見えている。

「上仰木遺跡が支えた延暦寺の伽藍を見て、古代からの古道 きらら坂を京都に下ろう。」

きらら坂は平安時代 京都から比叡山と結ぶ本道で最澄 法然 親鸞 日蓮 道元など数々の高僧がこの道を通して比叡山に入った。

また 近江 坂本側日吉神社の上奥を担いだ比叡の荒法師が都を暴れまわった道である。

学生時代に何度も京都側から比叡山に登った道ですが、40年ぶり。

きらら坂は「雲母坂」と書き、花崗岩に含まれる「雲母」がきらきら輝くことからつけられた名前である。花崗岩中の砂鉄にも随伴する鉱物で、良く知らないが比叡山山中の鉄鉱石の鉱脈・路頭もこの辺りの山中にあるのかもしれない「鉄の道」でもある。

さすがに 時計を見て 上仰木からそのまま横川を経て比叡山に登る元気なし。 坂本からケーブルで比叡



京都市内から見た比叡山

山に上がって 根本中道から四明が嶽を通過して 蛇池のスキー場の横へ出て きらら坂を修学院離宮の横へ下りてきました。

比叡山の上はさすがに山の上 あちこち日陰に雪が残っていましたが、延暦寺から京都修学院まで 約2時間ほどぶらぶらと静かな山中の古道ハイクを楽しんで帰りました。



まだ 日陰には雪が残る比叡山 延暦寺 根本中堂周辺 2006.2.25.



京都修学院 比叡への古代からの上り口 雲母坂 登り口 2006.2.25.

写真アルバム

比叡山から京都修学院へ 平安時代の古道 「雲母坂」ハイク その1



比叡山 根本中堂 2006.2.25.



雪が残る根本中堂から四明が嶽・京都へ山越えする道

写真アルバム
比叡山から京都修学院へ 平安時代の古道 「雲母坂」ハイク その2



四明が嶽周辺 京都へ山越えする道



四明が嶽から 南 大津・比叡平の市街地 遠望



四明が嶽の下 蛇が池スキー場・八瀬ケーブル周辺



蛇が池ケーブル周辺から 京都市街地 左:松ヶ崎 中央:宝ヶ池・岩倉

写真アルバム
比叡山から京都修学院へ 平安時代の古道 「雲母坂」ハイク その3



京都一周トレイル 北白川へ下る道と雲母坂を下る道の分岐周辺 2006.2.25.



修学院離宮の金網に総当り、急な下り坂が続く



急な坂を下ると標識・案内板のある雲母坂の上り口



雲母坂を下って一乗寺・曼殊院の坂を下って市街地へ 白川通りから振り返ると比叡山



今日は一日 古代の道をたどって、ご機嫌の一日でした。

比叡山の麓で 古代の製鉄遺跡 この郷は北に比良 西に比叡そして
眼下に琵琶湖がえんぼうされ、美しい棚田が広がる日本の原風景 素晴ら
しいところでした。そして 調べてゆくと 比叡の山中には製鉄原料の鉄
鉱石があり、比叡山と京都を結ぶ古代からの道「雲母坂」はきらきら雲母
が輝く鉄の道。幾多の勅使・高僧たちが行き来した道
近江の鉄の存在感を改めて感じた一日でした。

目算どおり、夕方 下る曼殊院からの夕日が素晴らしい。

2006.2.25.夕 Mutsu Nakanishi